

Examination of the Relationship between Stress Coping Ability (SOC) and Evaluation in the Child Care Practicum

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀田, 正央, 坂田, 知子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1352">https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1352</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 保育実習におけるストレス対処能力（SOC）と 実習評価の関連性の検討

## Examination of the Relationship between Stress Coping Ability (SOC) and Evaluation in the Child Care Practicum

堀 田 正 央・坂 田 知 子

HOTTA, Masanaka SAKATA, Tomoko

### I はじめに

わが国における保育所利用率は年々高まりを見せ、厚生労働省発表の「保育所等関連状況取りまとめ（平成30年4月1日）」によれば、1、2歳児の保育所利用率は平成26年に31.0%だったものが平成30年には47.0%となっている。また平成30年4月時点での待機児童数は19,895人であり、年々減少傾向にはあるものの、保育サービスの需給関係に依然改善の余地があることが示唆されている。<sup>1)</sup>一方、指定保育士養成施設で保育士資格を取得したもので保育所/幼稚園/認定こども園に就職する割合は83.2%であり、保育士資格を持ちながら保育士就職を希望しない求職者の内、保育士としての勤務経験があった場合に5年以内に離職をしている割合は50.2%に達し、潜在保育士の51.0%が30代から40代であるとの報告もある。<sup>2)</sup>

保育士としての就業を希望しない理由としては「賃金が希望と合わない」（47.5%）、「休暇が少ない、休暇が取りにくい」（37.0%）等が上げられているが、いずれも指定保育士

養成施設の課程内では学び難い職域としての保育所の実態に関わるものである。<sup>3)</sup>保育士養成課程における保育現場でのトレーニングの機会としての保育所実習は、必修科目である保育実習Ⅰ（保育所）と保育実習Ⅱがあるが、実習期間は保育実習実施基準においてそれぞれ“おおむね10日”と定められているのみであり、介護福祉士養成課程の介護実習450時間と比べても短く、指定保育士養成施設での課程を修めれば国家資格を経ずに資格取得が可能となっている。<sup>4)</sup>実習内容についても全国保育士養成協議会がミニマム・スタンダードを示してはいるものの、全ての養成校と実習先で共有されているとは言えず、現在まで明確に内容を規定した法令が存在しない。<sup>5)、6)</sup>

保育士就職希望者が短期間の保育実習において職域としての保育所の本来業務と職業倫理をどの様に捉え、どこに難しさを感じるのかは、将来の保育分野に大きな影響があると考えられる。本研究は、ストレス対処能力（Sense of Coherence：以下SOC）と保育実習Ⅱ期間中の実習生が抱えるストレスの種

キーワード：保育実習、ストレス対処能力、実習記録、非認知能力

Key words : child care practicum, stress coping ability, practice record, non-cognitive ability

類を明らかにし、実習評価との関連を検討することで、保育士志望の学生がより良い実習経験を持ち、将来の潜在保育士化を抑制すると共に、質の高い保育専門職となる一助とすることを目的とする。

## II 方法

### 1) 調査対象と期間

2018年3月、指定保育士養成施設である首都圏4年制大学において、保育士養成課程に登録し保育実習Ⅱの事後指導を受けた学生79名を対象とした。

### 2) 調査方法と内容

保育実習Ⅱの事後指導時に集合式質問紙調査を行った。質問票の内容は年齢、性別、実習前後の居住形態、実習先までの通勤時間、

実習期間とその他の期間の平均的な睡眠時間、実習時における健康状態の自己認識、保育所保育士としての就職希望の有無、実習中におけるストレス、実習中のストレスに対する対処、実習中に相談できる対象、ストレス対処能力（SOCスケール短縮版）、実習の意義、実習の自己評価である。回収率は100%であり、欠損値等の処理の後79票を分析に投入した。

### 3) SOCとは（表1）

SOCは自分を取り巻く世界や環境が首尾一貫しているという感覚である。Antonovsky A.によって開発されたストレス対処能力であり、3つの下位概念、「把握可能感」、「処理可能感」、「有意味感」から構成される。「把握可能感」は、自分の人生において直面する問題

表1. SOC-13（日本語版）の各項目と下位概念との関連

	項目	把握可能感	処理可能感	有意味感
1	あなたは自分のまわりで起こっていることがどうでもいい、という気持ちになることがありますか			○
2	あなたはこれまでによく知っていると思っていた人の思わぬ行動に驚かされたことがありますか	○		
3	あなたはあてにしていた人がっかりさせられたことがありますか		○	
4	今まであなたの人生は明確な目標や目的がありましたか			○
5	あなたは不当な扱いを受けているという気持ちになることがありますか		○	
6	あなたは不慣れな状況の中にいると感じ、どうすればよいのかわからないと感じていますか	○		
7	あなたが毎日していることは喜びと満足を与えてくれますか			○
8	あなたは気持ちや考え方が非常に混乱することがありますか	○		
9	あなたは本当なら感じたくないような感情を抱いてしまうことがありますか	○		
10	あなたは自分をだめな人間だと感じることがありますか		○	
11	何か起きた時普通あなたはそのことを過大に評価したり過少評価したりしてきましたか	○		
12	あなたは日々の生活で行っていることにはほとんど意味がないと感じることがありますか			○
13	あなたは自制心を保つ自信がなくなることがありますか		○	

出典：Antonovsky, A. 著, 山崎喜比古監訳『健康の謎を解く ストレス対処と健康保持のメカニズム』有信堂、2001.

が何によるのか、何が起ころうとしているのかをある程度把握したり予測したりすることのできる感覚である。「処理可能感」は、課題に対応する資源がいつでも得られ、自分は何んとかやっていけると思う感覚である。「有意味感」は日々の営みや課題には意味があり、問題解決においては過程でのストレスにも対処のしがいがあるという感覚である。日本ではAntonovsky A.のSOC-29を元に山崎らが1999年に開発した29項目から成るSOC-29日本語版と、13項目からなるSOC-13日本語版があり、本研究では回答者の負担を考慮してSOC短縮版を採用した。<sup>7), 8), 9)</sup>

#### 4) 分析方法

SOC短縮版において得点の上位25パーセントに含まれるケースを高SOC群、それ以外のケースを低SOC群と定義した。自己評価、実習園評価については最高評価である優評価を高評価群、それ以外を低評価群とし、実習中のストレスおよびストレスに対する対処、相談できる対象、実習の意義については、リッカート型4件法による順序尺度の内、「あった」、「ややあった」等の肯定的回答したケースを有り群、「あまりなかった」、「なかった」

と回答したケースを無し群とした。各項目の単純集計の他、高SOC群と低SOC群においてストレスとその対処、相談可能な対象、実習評価についての差異を検討するために、 $\chi^2$ 乗検定を行った。

### Ⅲ 結果

#### 1) 基本属性および実習時の生活環境 (図1)

対象となった79名の内、男性は18名 (22.8%)、女性は61名 (77.2%)であった。居住形態について、実習前から家族と同居していたのが64名 (81.0%)、実習のみ家族と同居していたのが11名 (13.9%)、実習前から実習中にかけて一人暮らしだったものが4名 (5.1%)であった。実習園までの通勤時間は、最短が2分、最長で45分であり、平均して16.1±10.1分となっていた。実習前と実習中の睡眠時間については、実習前の平均睡眠時間が6.6±1.2時間、実習中の平均睡眠時間は5.2±1.7時間であり、実習中の睡眠時間が実習前よりもばらつきを見せながら平均で約80分以上短くなる結果となった。

#### 2) 将来の進路 (図2)

将来の就職先として最も多く上がったのは

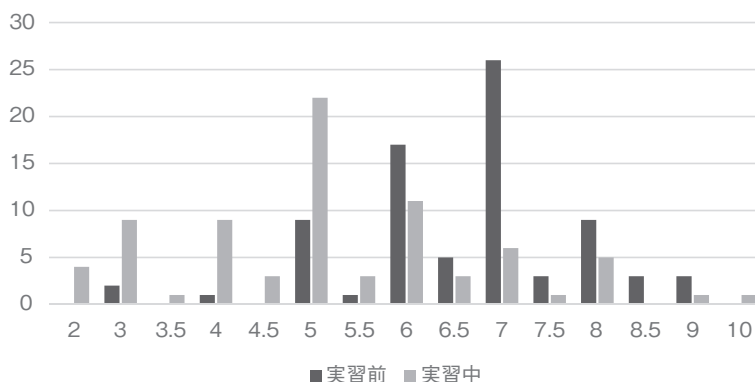


図1. 実習中の平均睡眠時間の変化 (N=79)

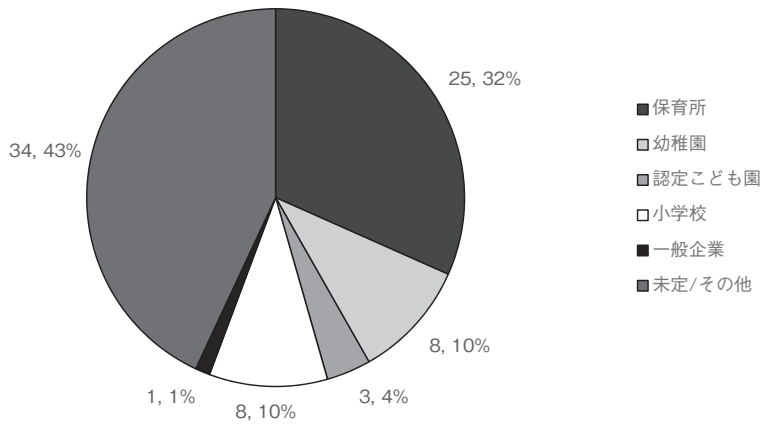


図2. 将来の進路 (N=79)

表2. 参照集団とのSOC総合点平均値の比較

集団	N	SOC平均値
本対象	79	54.2
A	537	49.9
B	134	51.1
C	175	50.7
D	78	52.0
E	108	48.4

集団A～Eは参考文献4より引用

保育所の25名 (31.6%)、次いで幼稚園、小学校のそれぞれ8名 (10.1%)、認定こども園の3名 (3.8%)であった。また保育実習Ⅱの事後指導時に未定であるか、その他の就職先を希望したのは34名 (43%)であった。

### 3) SOC総合得点 (表2)

対象のSOC総合点の平均値は $54.2 \pm 6.7$ であり、先行研究における高等教育機関 (専門学校/大が鵜) に属する5つの参照集団と比較して最も高い値となった。<sup>10)</sup>

### 4) 実習の意義と自己評価および施設評価 (図3)

実習の意義について、有意義と答えたのは

43名 (54.5%)であり、おおむね有意義の31名 (39.2%)と併せると、74名 (93.6%)が実習を肯定的に捉えていた。

実習の自己評価および施設評価について、「優」、「良」、「可」、「不可」の内、自己評価/施設評価共に「不可」のケースは無かった。両方を通じて最も多かったのは「良」評価であり、自己評価で65名 (82.3%)、施設評価で47名 (59.5%)と共に過半数を超えていた。「優」評価は自己評価で5名 (6.3%)、施設評価で19名 (24.1%)であり、「可」評価は自己評価で9名 (11.4%)、施設評価で13名 (16.8%)と、共に自己評価よりも施設評価の方が割合が高い結果となった。また37名 (46.8%)については自己評価と施設評価が一致しなかった。

### 5) 実習中のストレス (図4)

実習中のストレスの有無について、最も多かったのは実習記録の作成の72名 (91.1%)、次いで指導案の作成の66名 (83.5%)であり、最も少なかったのは大学への連絡の10名 (12.7%)、次いで子どもとの関わりの23名 (29.1%)であった。

保育実習におけるストレス対処能力(SOC)と実習評価の関連性の検討

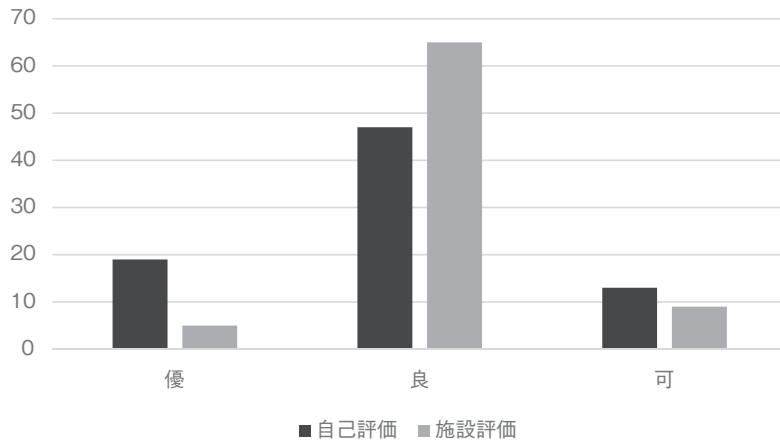


図3. 保育実習Ⅱに対する自己評価と施設評価 (N=79)

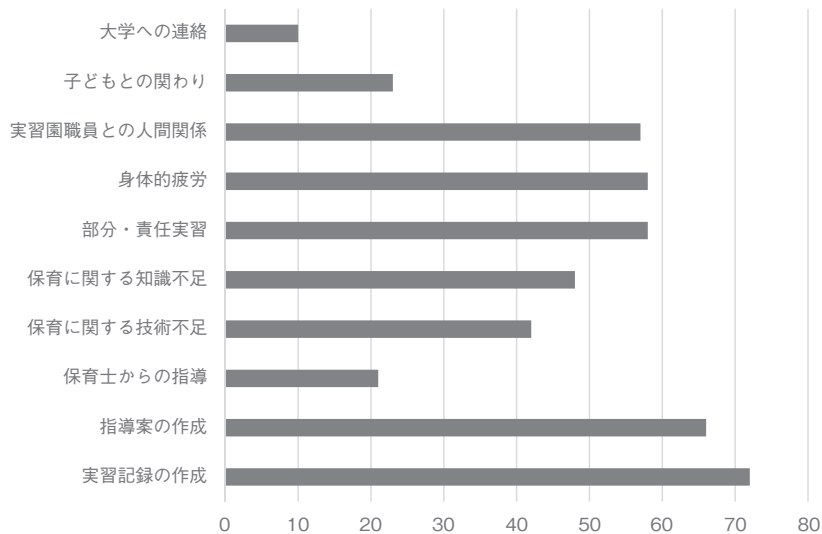


図4. 実習中のストレスの有無 (N=79)

6) 実習中のストレスへの対処 (図5)

実習中のストレスへの対処として、最も対処されていたのは保育に関する知識不足の30名(38.0%)と実習園職員との人間関係の30名(38.0%)、次いで保育に関する技術不足の29名(36.7%)であった。最も対処されていなかったのは保育士からの指導の3名(3.8%)であり、次いで指導案の作成の4名(5.1%)および部分・責任実習の4名(5.1%)

であった。

7) 実習中の相談可能な対象 (図6)

実習中に相談可能な対象として最も割合が高かったのは、友達の73名(92.4%)であり、次いで実習園の職員の72名(91.1%)であった。最も割合が低かったのは大学の職員の45名(57.0%)、次いで実習園の園長の47名(59.5%)であった。

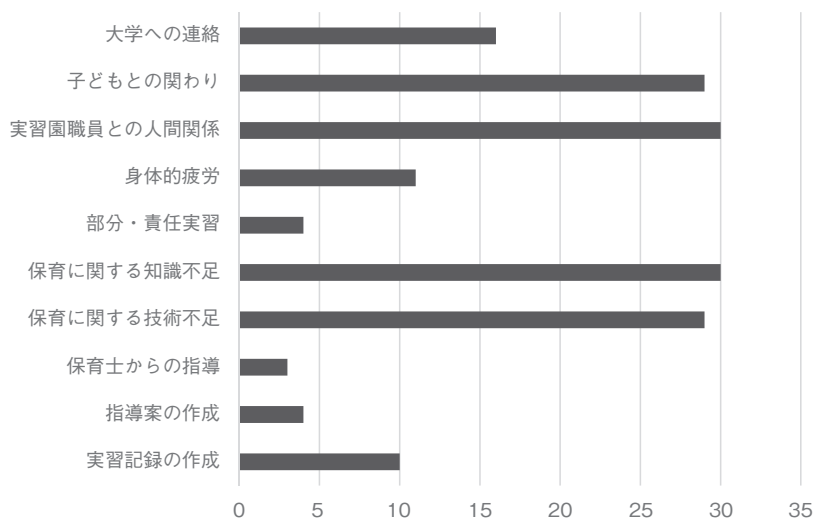


図5. 実習中のストレスへの対処の有無 (N=79)

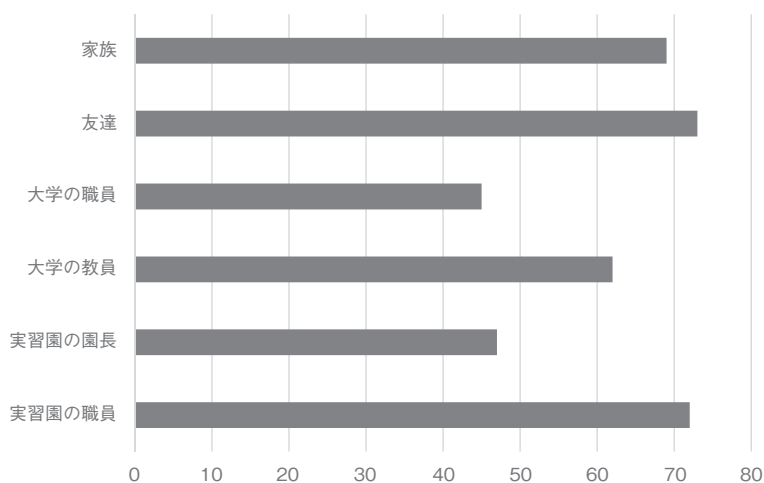


図6. 実習中に相談可能な対象 (N=79)

8) 各SOC得点群における実習中のストレス、実習中のストレスへの対処、実習中に相談可能な対象、実習の自己評価および施設評価 (表3)

高SOC群、低SOC群と各項目の $\chi^2$ 乗検定の結果、有意差が認められたものは「部分・責任実習のストレス」(p=0.027)、「部分・責任実習の対処」(p=0.025)、「大学への連絡の

対処」(p=0.032)、「実習施設評価が優」(p=0.018)の4項目であった。「部分・責任実習のストレス」、「大学への連絡の対処」では低SOC群が当てはまる割合が高く、「部分・責任実習の対処」、「実習施設評価が優」では高SOC群が当てはまる割合が高い結果となった。

表3. 各SOC得点群におけるストレス項目、ストレス対処項目、相談可能な対象、実習評価の比較

	高SOC群 (n=16)		低SOC群 (n=63)		p 値
	n	%	n	%	
下記項目ストレスあり					
実習記録の作成	14	87.5	58	92.1	0.625
指導案の作成	15	93.8	51	81.0	0.286
保育士からの指導	6	37.5	15	23.8	0.343
保育に関する技術不足	8	50.0	34	53.9	0.787
保育に関する知識不足	7	43.8	31	49.2	0.783
部分・責任実習	8	50.0	50	79.4	0.027 *
身体的疲労	12	75.0	46	73.0	1.000
実習園職員との人間関係	11	68.8	46	73.0	0.760
子どもとの関わり	3	18.8	9	14.3	0.701
大学への連絡	3	18.8	7	11.1	0.415
下記項目対処あり					
実習記録の作成	1	6.3	9	14.3	0.677
指導案の作成	0	0.0	4	6.3	0.577
保育士からの指導	1	6.3	2	3.2	0.498
保育に関する技術不足	5	31.3	24	38.1	0.774
保育に関する知識不足	6	37.5	24	38.1	1.000
部分・責任実習	3	18.8	1	1.6	0.025 *
身体的疲労	3	18.8	8	12.7	0.686
実習園職員との人間関係	4	25.0	26	41.3	0.265
子どもとの関わり	3	18.8	26	41.3	0.146
大学への連絡	0	0.0	16	25.4	0.032 +
下記対象に相談可能					
実習園の職員	16	100	56	88.9	0.334
実習園の園長	8	50.0	39	61.9	0.279
大学の教員	12	75.0	50	79.4	0.738
大学の職員	10	62.5	35	55.6	0.779
友達	14	87.5	59	93.7	0.595
家族	13	81.3	56	88.9	0.415
実習自己評価「優」	1	6.3	4	6.5	1.000
実習施設評価「優」	8	50.0	11	17.5	0.018 *

\*:  $\chi^2$  乗検定、+: Fisherの正確確率検定による

## IV 考察

### 1) 基本属性および実習時の生活環境

実習期間中に1人暮らしだったものは4名(5.1%)に過ぎず、ほとんどの学生は何等かの形で同居者からのサポートを受けた中で実習であることが示唆された。勤務時間も最長で45分と一般的な社会通念上は過大な負担になるとは考えにくく、生活環境は比較的良好であることが考えられた。一方で睡眠時間は実習前よりも平均で80分以上短く、実習記

録の作成等で実習勤務時間外にも多くの時間を割く必要がある様子が伺えた。

### 2) 将来の進路

仮説に反して進路がその他や未定である割合が高く、最後の保育実習の時点においてもまだ具体的な展望が掴めていないことが示唆された。対象となる学生が所属する指定保育士養成施設は保育実習Ⅱの後に幼稚園教諭、小学校教諭の免許取得にむけた教育実習が設定されており、全ての実習を終えていない段



階での意思決定が困難であることが推測された。

### 3) SOC総合得点

対象のSOC総合得点は同年代のどの参照集団よりも高い結果となった。参照集団の多くは看護師教育課程に所属しており、相対的に緩やかなカリキュラムを持つ保育士養成課程に所属する対象は、特に把握可能感、処理可能感を持ちやすい環境にいることが考えられた。

### 4) 実習の意義と自己評価および施設評価

対象の74名（93.6%）が実習を有意義と捉える中で、施設評価で「優」を得たのは全体で22名（27.8%）に留まり、多くの学生が何等かの課題を抱えていることが明らかとなった。一方で37名（46.8%）については自己評価と施設評価の不一致が見られ、事後の反省会等での課題の共有が行われているケースが多いにも関わらず、妥当性の高い自己評価が行えていないことが示唆された。

### 5) 実習中のストレス

保育実践における子どもや保育士との関わり等の対人ストレスは相対的に割合が低く、実習記録の作成（72名、91.1%）や指導案の作成（66名（83.5%））がストレスとなる割合が高かった。保育実践そのものよりも、事後の記録や事前の計画がストレスになっていることが示唆され、それらを準備するための時間が、先に示したように睡眠時間が実習前よりも短縮されることの原因となり、さらなるストレスへとつながることが考えられた。

### 6) 実習中のストレスへの対処

実習のストレスへの対処については、ストレスがあるから対処をするケースや、対処されているからストレスが無いケース等の前後関係が見えにくく、質問票の構造的な瑕疵と言える。一方でストレスとして高い割合であげられた実習記録の作成への対処は10名（12.7%）、指導案の作成への対処は4名（5.1%）と他の項目に比べても低い割合に留まり、ストレスを感じながらも具体的な対処が困難な様子が示唆された。

### 7) 実習中の相談可能な対象

全ての項目について過半数が相談可能と回答しており、相談可能な対象が無かったケースはゼロであった。相対的に割合が低い大学職員（45名、57.0%）は対象の所属する保育士養成課程においては主として事務手続きを担っていることから、実習中の相談窓口としての認知が低いことが考えられた。実習園の園長（47名、59.5%）についても実習時の具体的な指導を担当しないケースも多く、そもそも相談対象として考え難い場合もあると推測された。相談可能な対象が一定確保されている一方で、実習記録の作成や指導案の作成では80%以上がストレスを抱えており、実習生が抱えるストレスに対する的確な助言を行う相談対象をどう確保するのが課題と考えられた。

### 8) 各SOC得点群における実習中のストレス、実習中のストレスへの対処、実習中に相談可能な対象、実習の自己評価および施設評価

各SOC得点群の比較では、ストレス項目について「部分・責任実習」（ $p=0.027$ ）の項

目で高SOC群においてストレスを感じる割合が低かった。またストレス対処項目については、「部分・責任実習」( $p=0.025$ )で高SOC群において有意に対処割合が高く、「大学との連絡」( $p=0.032$ )において低SOC群において有意に対処割合が高かった。このことは「部分・責任実習」が実習におけるストレスラーとして存在し、高SOC群がより対処をしていることを示すものの、前後関係を規定できるものではなく、低SOC群が相対的に対処できていない要因を分析することが今後の課題と言える。「大学との連絡」のストレス対処項目において高SOC群はケースが0であり、高SOC群が大学と連絡自体を必要としなかったことが考えられた。

実習施設評価が「優」であることについて、高SOC群は有意に割合が高く、全ての項目を通じて最も小さいp値を示した。実習施設評価は標準化された評価項目によるものではなく、指導者の恣意性が相当程度影響する可能性は否めないものの、相対的に高い首尾一貫感覚がより良い実習の成果に繋がっていることが示唆された。

## V 結論

学習内容が法令等で具体的に示されていない保育実習Ⅰ(保育所)、保育実習Ⅱにおいては、事前のオリエンテーションを受けたり、ミニマム・スタンダードを参照する等の準備は可能であるものの、指導の内容や強度については各園で異なり、学生は“蓋を開けてみるまでは分からない”ことが多く、時に想定外のストレス場面に晒されながらストレス対処能力を試される可能性が高い。今回の結果からも、将来の展望を明確に掴めないまま、実習記録や指導案の作成に苦慮しながら睡眠

時間を削って実習に取り組む姿が伺えた。

ストレス項目について最も割合が高かったのは「実習記録の作成」や「指導案の作成」といったドキュメンテーションに関するものであったが、その双方が15%以下しか対処されておらず、指定保育士養成施設内での事前指導を始めとした各授業の内部で実習と関連したドキュメンテーションを学ぶ機会を充実させる必要があると考えられた。

相談可能な対象は全ての項目で過半数を超えていたが、一方でストレスが「あった」、「ややあった」と対象の50%以上が回答したストレス項目は13項目中7項目に及び、相談が適切な改善につながる実習中のシステムを養成施設と実習施設が連携しながら構築することの必要性が考えられた。

高SOC群は低SOC群と比べ、ドキュメンテーションの作成というストレスラーにより対処し、実習評価が高い傾向が見られた。SOCに代表されるストレス対処能力や実習時の心情・意欲・態度を始めとした非認知能力の高さが、より良い実習に繋がる可能性が示唆され、指定保育士養成施設においても単なる知識・技術だけではなく、明確なディプロマ・ポリシーや専門職養成像を意識して各授業を展開する必要があることが考えられた。

## 参考文献

- 1) 厚生労働省『保育所等関連状況取りまとめ(平成30年4月1日)』、[https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000176137\\_00009.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000176137_00009.html)(参照:2020年9月20日)。
- 2) 厚生労働省『保育人材確保のための魅力ある職場作りに向けて』、2017。
- 3) 厚生労働省職業安定局『保育士資格を有しながら保育士としての就職を希望しない求職者に対す

- る意識調査』、2014.
- 4) 厚生労働省通知『指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について』、2018.
  - 5) 社団法人全国保育士養成協議会専門委員会編『保育士養成 課程と関連する専門職養成課程の比較研究』、保育士養成資料集、31、2000.
  - 6) 全国保育士養成協議会編『保育実習のミニマムスタンダード～現場と養成校が協働して保育士を育てる～』、北大路書房、2007.
  - 7) 山崎喜比古『ストレス対処力SOC (Sense of Coherence) の概念と定義』、看護研究、42 (7)、479～490、2009.
  - 8) Antonovsky, A.著、山崎喜比古監訳『健康の謎を解く ストレス対処と健康保持のメカニズム』、有信堂、2001.
  - 9) 山崎喜比古『ストレス対処能力SOC』、有信堂、2008.
  - 10) 志渡晃一他『首尾一貫感覚 (SOC) と抑うつ症状との関連 ―高等教育機関に所属する学生を対象として―』北海道医療大学看護福祉学部紀要18号、43～48、2011.
  - 11) 坂野純子『SOC の発達・形成に関する理論と実証研究看護研究』、看護研究42 (7)、539～547、2009.
  - 12) 楠原慶子『保育者養成女子短期大学生の主観的健康度と生活習慣、首尾一貫感覚 (SOC) に関する縦断的变化』、陸橋女学院短期大学紀要45、49～58、2013
  - 13) 加藤由美、安藤美華代『保育士の抑うつに関連する要因の検討―経験年数、首尾一貫感覚、対処スキルに着目して―』、保育学研究54 (1)、54～66.
  - 14) 大澤優子、松下年子『精神看護学実習前後における学生のSOC (首尾一貫感覚) の変化』、埼玉医科大学看護学科紀要5 (1)、1～7、2012.
  - 15) 白井麻里子、他『看護学生のストレス対処能力と基礎看護学実習におけるストレス要因との関連』、名古屋市立大学紀要第13巻、27～34、2014.